

(別紙1)

## 論文の内容の要旨

論文題目 環オホーツク海沿岸地域古代土器の研究

氏名 熊木 俊朗

古代～中世における日本列島の北方史をめぐる研究は、「交流」をキーワードとして広域的な歴史動態を論じる、というダイナミックな展開を見せている。そこでは文献史料のみならず考古資料が非常に重要な位置を占めるのであるが、実は日本列島の北端部を含む環オホーツク海沿岸地域においては、考古資料の時間軸を定める上で重要な役割を担うはずの土器型式編年に不備や空白が残されたままとなってきた。

本論では、日本列島史で言う弥生時代から平安時代に至る時期において環オホーツク海の沿岸地域で使用されていた土器群、具体的には続縄文土器およびオホーツク土器を中心とした土器群について、考古学的方法を用いて型式編年を行い、当該時期・地域の歴史叙述のための基礎的データを提供するとともに、土器の分析を通じて明らかになった当該地域の人や情報の動態について考察した。その成果は、1. 広域にわたる地域間の編年対比の確立、2. 当該時期・地域における広域土器編年を可能とするための新たな視点・方法の提言、3. 土器の動きにあらわれた地域間交流様態の解明、4. 新発見資料・未報告資料の提示による「資料的空白」の補完、の4点に集約することができる。

成果の第1点は広域にわたる編年対比の確立である。続縄文時代においては北海道全域からサハリン南部に至る地域、オホーツク文化期では北海道からサハリン、アムール河口部にまで及ぶ地域の各土器型式群について、型式細別ならびに時期区分・地域区分を整理し、縦と横の関係を確定させた。具体的な成果は別紙添付の土器編年表に示したとおりである。

成果の第2点については時期別に述べる。まず本論第I部では続縄文土器の検討を行っているが、ここでは続縄文土器型式編年全体を構造的に捉える視点・方法を新たに提起した。恵山式土器を除く主要な続縄文土器型式の編年は同一の視点・方法で分析できる、というのが本論第I部での新たな提

言であり、この分析方法—文様割りつけ原理と文様単位の分析—を用いることにより、多数にのぼる続縄文土器型式間の構造的な同一／差異性が容易かつ系統的に把握可能となる、というのが本論第Ⅰ部における方法論上の成果である。続いて本論第Ⅱ部ではオホーツク土器についての検討を行っているが、ここでは「層位的所見」を偏重した先学の土器編年方法に対して問題点を指摘するとともに、すでに先学によっても提起されていた属性分析の手法を発展・精緻化させることにより、オホーツク土器型式編年の視点・方法を深化させた。オホーツク土器全体の広域編年対比を秩序立ったものとするには、アムール河口部から北海道にわたる広い地域の各土器型式群に対し、共通の視点で属性を分類・把握することが現状では最良の方法となる。本論第Ⅱ部ではそのような視点に立ち、属性分析的な手法を用いた編年を実践した。

成果の第3点についても時期別にまとめる。まずは本論第Ⅰ部の続縄文土器である。

- a) 続縄文前半期においては、東北北部～北海道南部の系統を母胎とする恵山式土器が、道南部で成立した後に北海道中央部（道央部）に分布域を拡大してゆくが、道央部では恵山式土器と在地の系統とが並立することはなく、いわば「なし崩し」的に恵山式土器が侵入し、受容されている。同じ頃、釧路地域でも網走地域の宇津内Ⅱa式土器がやはり「なし崩し」的に受容され、それまで存在していた網走／釧路地域間の地域差は縮小する。道央部と道東部においてこのような拡大があった後に、道央部で恵山式土器と宇津内式土器の両系統が接触して生じたのが後北A式土器である。後北A式土器の成立は、先立つ時期の恵山式アヨロ2b式相当の土器を母胎とし、続く時期に宇津内ⅡbⅠ式土器との型式交渉が強化されることによって独自の系統が生成されてゆくプロセスとして理解できる。
- b) 後北A式土器の成立以後、道南部／道央部／網走地域／釧路地域間の地域差は再び顕在化し、互いに交渉を持ちながらもこの4系統は意識的に排他性を保ち続け、後北C<sub>2</sub>・D式土器の成立期まで痕跡的にはあるが各系統が存続する。
- c) 続縄文後半期の後北C<sub>2</sub>・D式土器は、高い斉一性を持ちながら広域に分布するとこれまでは考えられてきた。しかし、時期別・地域別に後北C<sub>2</sub>・D式土器を細別してみると、以下のような地域差が段階的に生じていることが判明した。すなわち、成立当初の後北C<sub>2</sub>・D式土器には道央部／道東部それぞれの系統の影響が残ることにより地域差が生じているが、その後地域差は一旦解消される。しかし次の時期には道央部的な文様割りつけが道東部でいち早く崩壊することにより、地域差が再び顕在化してくる。このように斉一性が高いとされる後北C<sub>2</sub>・D式土器であっても、その「斉一性」には進行／後退するプロセスがあるので、結果としてこの土器型式にも地域差は存在することになる。
- d) 続縄文後半期のサハリン中部～北海道北端部に分布する鈴谷式土器の型式学的特徴については、これまで縄線文＝南部側に分布／櫛目文＝北部側に分布という二分法的な理解が支配的であったが、資料の現状との矛盾も多かった。鈴谷式土器の型式変遷を「複雑から単純へ」という視点から再整理してトレースすると、資料の現状をうまく説明できると同時に、そこには南北交流が段階的に進行するプロセスが浮かび上がってくる。

次に本論第Ⅱ部のオホーツク土器である。

- a) オホーツク文化初頭の土器である十和田式土器の分布はサハリン南西端部～北海道北端部に限られるが、次のオホーツク文化刻文期になると、アムール下流域の靺鞨系土器の影響を受けて環オホー

ツク海沿岸の広い地域でほぼ同一の土器型式（刻文系土器）が分布するようになる。北海道においては十和田式土器から刻文系土器への型式変化は非連続的であり、遺跡の継続性にも断絶が認められる例が多いことから判断すると、この時期にはサハリン以北から北海道へとヒトの流入があった可能性が高い。しかし刻文系土器には前半段階からすでに微細な地域差がある点等からすると、ヒトの流入は一元的な地域からの大規模な侵入ではなく、すでに萌芽的に存在していた各地域別のネットワークに取り込まれる形・規模で起こったものである、と考えることができる。

- b) オホーツク文化刻文期の土器群は 2 時期に細別可能であり、その後半期から顕著な地域差が生じ始める。地域差はまず宗谷海峡を境に生じ、その後さらに地域化が進んでアムール河口部／サハリン／北海道北部／北海道東部とそれ以东という型式圏に分かれるようになる。地域差がまず宗谷海峡を境として生じる背景には、擦文文化との交流が道北部でいち早く生じたことが影響している。またそのような交流によって、オホーツク土器・擦文土器両者に型式学的な影響が双方向的にもたらされ、特に道北部ではオホーツク土器の型式変化が促進された。
- c) 同じ頃、アムール河口部ではオホーツク式系統の土器と在地のテバフ式系統の土器の交渉が進み、両者の系統が「融合」した土器が生み出されるまでに至った。オホーツク文化とロシア極東地域の交流は、金属器等の大陸系遺物がアムール流域のものであることからその地域との関係が注目されてきたが、アムール河口部周辺の在地伝統やヤクーチャ方面との交流も視野に入れた多面的な視点が必要である。
- d) 北海道東部における刻文系土器から貼付文系土器への移行過程については、これまで不明な部分が多かった。この問題は、刻文系土器と貼付文系土器の間に、道北部の沈線文系土器に併行する時期を新たに設定すると理解が容易になる。具体的な移行過程は、まず沈線文期の前半には道東部独自の系統の上に道北部の影響が及び、その後再び道東部の系統が復活し、逆に道東部から道北部へと型式学的な影響が及び始める、という流れである。
- e) 続いて、北海道では貼付文期後半になると道北部の系統は衰退し、道東部の系統が勢力を強めてくる。最終的には道北端部にまで貼付文系土器が分布するようになる。

成果の第 4 点はオホーツク土器に関する「資料的空白」の補完である。まずアムール河口部の資料についてはこれまでまとまった量の資料はほとんど報告されていなかったが、本論では 2001 年度に発掘調査されたニコラエフスク空港 1 遺跡の出土資料を詳しく紹介・分析することにより、この地域の土器群の実態をまとまった形で初めて明らかにした。続いてサハリンの資料については、情報が少なかったこともあり戦後はまとまった形で論じられることはほとんど無かったが、本論では改めて関連資料を渉猟しつつ、具体的な土器の分析に基づいて型式編年を再構成した。また、北海道の資料については、オホーツク文化の最重要資料の一つであるにもかかわらず不明な点が多い網走市モヨロ貝塚出土の土器群について、新たに実測して再報告し、北海道東部における土器型式編年の基礎資料を提供した。

以上が本論の成果である。広域編年対比が確立していない環オホーツク海沿岸地域においては本論の持つ意義は決して小さくなく、本論は日本列島とその北方地域の交流史解明のための足固めとしての役割を果たすことになるであろう。

続縄文土器編年表

時期区分※1	道南部	道央部	道東部網走	道東部釧路	道北端部	
前半	早期	(尾白内II群)	砂沢式~二枚橋式併行期 (碁似式・N30等)	(栄浦第二・第一)	(フシココタン下層)	(メクマ)
		二枚橋式新段階		元町2式	興津式	(種屯内Ic・Id)
	前期	Aヨロ1式	Aヨロ1式併行期※2	宇津内IIaI式 宇津内IIaII式	下田ノ沢I式	(芦間川大曲III B)
		Aヨロ2a式	江別太III6層段階			
		Aヨロ2b式	Aヨロ2b式相当 (N295等)			
	中期	Aヨロ3a式	後北A式	宇津内IIbI式	下田ノ沢II1式	※3
Aヨロ3b式		後北B式				
後半	後期	(聖山KII群)	後北C1式	宇津内IIbII式	後北C1式※4	鈴谷式
		後北C2・D式【I期】 後北C2・D式【II期】 後北C2・D式【III期】				
		北大I				
	晩期	北大II※5			十和田式 (オホーツク土器)	

- ※1 時期区分は、宇田川洋氏の5期区分(宇田川1982)をもとに、早期を一部改定して設定した。
- ※2 早期の土器群から波状沈線文・波状縄線文が消滅した段階。その他の型式学的特徴は早期とほぼ同じ。江別太遺跡V~III7層の一部等が相当すると思われるが詳細不明。
- ※3 宇津内IIb式や後北A式等が断片的に確認されている。
- ※4 南千島では下田ノ沢II2式が確認されている。
- ※5 道東部網走地域ではほとんど出土しない。また道央部と道東部釧路地域の間では地域差が著しい。

続縄文・擦文・オホーツク土器編年表

暦年代	続縄文・擦文	オホーツク						
		時期区分	アムール河口	サハリン北部	サハリン南部	北海道北部	北海道東部	
5世紀	北大I式	I	(未詳)		十和田式前半	北大I式		
6世紀	北大II式				十和田式後半	(十和田式後半)		
7世紀前半 ~中葉	塚本編年1期	II	江の浦式1類~刻文I群~モヨロI群1a類					
		刻文期後半	テバフ式c類	江の浦式2類		刻文II群	モヨロI群1b類・2類 モヨロII群	
7世紀後半 ~8世紀前半	塚本編年2期	III	テバフ式b類	江の浦式河口部3類	沈線文群前半	モヨロIII群・V群1類		
		沈線文群後半			モヨロIV群・V群2類			
8世紀中葉 ~後葉	塚本編年3期	IV			江の浦式サハリン3類		藤本d群併行	藤本d群
		貼付文群後半					(藤本e群)	藤本e群
9世紀前半 ~10世紀前半	宇田川編年前期			元地式	擦文	トビニタイII		
10世紀中葉 ~11世紀前半	宇田川編年中期	トビニタイ期前半	テバフ式a類	(南貝塚式?)				
11世紀後半 ~12世紀前半	宇田川編年後期	トビニタイ期後半			トビニタイIII・I			
12世紀後半 ~13世紀代	宇田川編年晩期							